

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	野口太輔
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学准教授） 内田 香奈子 副主査：（上越教育大学教授） 越 良子 委員：（鳴門教育大学教授） 川上 綾子 委員：（鳴門教育大学教授） 池田 誠喜 委員：（鳴門教育大学特任教授） 山崎 勝之
3. 論文題目	小学校低学年児童を対象にした自律的自尊感情を育成する 教育プログラムの開発と効果評価
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座 野口太輔 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和8年2月7日（土） 13時30分～14時45分          場 所：オンライン</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>本論文は、以下に示す、4部、全13章から構成されている。</p> <p>第Ⅰ部 自尊感情の教育と研究の動向並びに本研究の目的</p> <p>第1章 自尊感情を扱った心理教育の動向</p> <p>第2章 自律的自尊感情の概念・測定法・教育プログラムの理論と研究課題</p> <p>第3章 本研究の目的と意義</p> <p>第Ⅱ部 低学年児童用の自律的自尊感情の測定法開発</p> <p>第4章 低学年児童を対象としたIATの構想【研究1】</p> <p>第5章 小学校2年生を対象とした自律的自尊感情の測定法開発【研究2】</p> <p>第6章 小学校1年生を対象とした自律的自尊感情の測定法開発【研究3】</p> <p>第Ⅲ部 低学年児童用の自律的自尊感情の育成プログラムの開発及び教育効果</p> <p>第7章 低学年児童用の自律的自尊感情の育成プログラム【研究4】</p>

## 第 8 章 予防教育「自律的自尊感情の育成」プログラムの教育効果

—小学校 2 年生における教育目標に関する効果検証—【研究 5】

## 第 9 章 予防教育「自律的自尊感情の育成」プログラムの教育効果

—小学校 1 年生における教育目標及び波及効果に関する効果検証—【研究 6】

## 第 10 章 予防教育「自律的自尊感情の育成」プログラムの教育効果

—小学校 2 年生における波及効果に関する効果検証—【研究 7】

## 第 IV 部 本研究の総合考察と自尊感情の測定法及び教育への展望

### 第 11 章 総合考察

### 第 12 章 自尊感情教育への視座

### 第 13 章 要約並びに結論

概要は以下の通りである。

自律的自尊感情は、幼児期から基盤が形成されると考えられており、早期からの支援が重要である。しかし、これまでの自律的自尊感情に関する研究や教育実践は主に中・高学年児童を対象として行われてきたため、低学年児童の発達的特徴に即した評価法や教育プログラムは十分に整備されていなかった。そこで本研究では、低学年児童にも適用可能な自律的自尊感情の測定法を開発し、その信頼性・妥当性を検証するとともに、自律的自尊感情の育成プログラムを開発し、その教育効果を明らかにすることを目指した。

第 I 部、第 1 章では、自尊感情に関する心理教育および研究動向を整理した。自尊感情は健康や適応に関わる重要な心的特性であり、近年では社会情動的スキルの中核的要素として国際的にも位置づけられていた (OECD, 2018)。こうした動向を背景に、日本の学校教育においても自己肯定感の育成が重視されていた (文部科学省, 2022)。一方で、自尊感情には適応的側面と不適応的側面が存在することが指摘され (Deci & Ryan, 1995; Kernis, 2003)、両側面を弁別することの重要性が指摘され始めた。

そこで第 2 章では、自尊感情の理論的枠組みとして自律的自尊感情に着目した。山崎他 (2017) は、自尊感情の適応的側面を有する「自律的自尊感情」と不適応的側面を有する「他律的自尊感情」を区別して提唱した。これを受け、潜在連合テスト (IAT) を用いた測定法が開発され (横嶋他, 2017)、TOP SELF に基づく育成プログラムが中学年以上の児童を対象に実践されてきた (横嶋他, 2018; 賀屋他, 2020)。しかし、低学年児童を対象とした測定法や教育プログラムは未整備であり、本研究の課題とされた。これらの課題を踏まえ、第 3 章では本研究の目的と意義を示した。研究目的は、小学校低学年児童を対象に、自律的自尊感情の測定法および育成プログラムを開発し、その有効性を検証することであった。

そして、第 II 部では低学年児童用の自律的自尊感情の測定法の開発を行った。まず第 4 章 (研究 1) では、低学年児童を対象とした IAT 開発の構想を練り、他者評定法の課題や先行研究における IAT の開発経緯を整理した。第 5 章 (研究 2) では、顔文字刺激を用いた低学年児童用自律的自尊感情簡易版潜在連合テスト (Brief Implicit Association Test for Autonomous Self-Esteem for Lower Grade Children: IAT-ASE-LGC) を開発し、小学校 2 年生を対

象に信頼性・妥当性の検討を行った。その結果、再検査信頼性は $r=.68$ と中程度から高い水準であり、行動評定との関連から妥当性が支持された。第6章（研究3）では、小学校1年生を対象としてIAT-ASE-LGCの適用可能性を検討した。再検査信頼性は $r=.70$ と良好であり、行動評定との関連から妥当性も支持された。

そして第Ⅲ部では、低学年児童用の自律的自尊感情の育成プログラムの開発及び、研究1、研究2、および研究3を経て作成した教育効果評価ツールをもとに、プログラムの教育効果の検証を行った。まず第7章（研究4）では、先行研究（賀屋他，2020）を基盤とし、アニメ主導型の教育プログラムの構想を検討後、低学年児童の発達の特徴を踏まえ、自律的自尊感情の育成を目的とした教育プログラムを開発した。つづく第8章（研究5）では、開発した自律的自尊感情育成プログラムについて小学校2年生を対象に実施し、教育効果の検証を行った。介入前後にIAT-ASE-LGCを実施した結果、教育群において自律的自尊感情を示す潜在指標が向上し、待機群では同様の変化は認められなかった。これにより、本プログラムが小学校低学年児童においても、自律的自尊感情に働きかける教育的効果を有する可能性が示された。第9章（研究6）では、さらに低年齢である小学校1年生を対象として同様のプログラムを実施し、実施可能性と教育効果の検証を行った。その際、IAT-ASE-LGCだけでなく、Q-U（河村，2005）を用いて教育の波及効果の検証も行った。その結果、1年生においてもプログラムは実施可能であり、IAT-ASE-LGCの結果から、教育効果が確認された。波及効果については、被侵害得点に関して教育効果が示された。そして第10章（研究7）では、第8章で未検証であった教育の波及効果について小学校2年生を対象に検証した。その結果、教育群において、Q-Uにおける被侵害感に関する指標が低下し、学級内での人間関係の安定が高まる傾向が確認された。加えて、担任及び授業実施教員へのインタビューからも、学級の落ち着きに関する肯定的な変化が語られた。

上記の研究を受け、第11章では、本研究で得られた知見を統合し、低学年児童用のIAT-ASE-LGCの開発と、低学年児童用の自律的自尊感情育成プログラムの検証結果を総括し、その有効性を論じた。そして第12章では、本研究の成果を学校教育へ活用する可能性を論じ、Positive Behavioral Interventions and Supports(PBIS)を基盤とした包括的支援システムへの統合の有効性を示すとともに、教師研修体制や多面的評価体制の整備といった今後の課題と展望を示した。

## 2. 審査経過

本論文の審査と評価の概要は、以下のとおりであった。

本論文では、低学年児童の非意識レベルにおける自尊感情を測定するという課題を踏まえ、顔文字刺激を用いた潜在連合テスト（IAT-ASE-LGC）を開発し、精度高く教育プログラムの効果評価を試みた点が高く評価された。自律的自尊感情は幼児期から形成が始まることが指摘されており、その発達初期段階における把握と支援が重要である。しかし、低学年児童における自尊感情の測定上の課題として、自己報告式質問紙では自身の内面を客観的に把握して回答することが困難である点が挙げられる。低年齢児の自尊感情測定には他者評定法

が用いられてきたものの、自尊感情は抽象度の高い概念であり、自己評価との一致が必ずしも高くないことが指摘されている。このことは、他者評定法の有効性と同時に限界を示すものであり、低年齢児における自己評価に基づく測定手法の開発が必要な状況にある中で、本テストの開発や標準化を目指した点は注目された。

また、教育プログラムについても、これまで開発例が乏しい一方で、その必要性が高まっていた小学校低学年児童を対象として構成され、理解度や注意集中力が十分でない低学年児童にも適用可能な内容となることを目指した点も評価された。プログラムは、トップ・セルフ (TOP SELF: Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship) と呼ばれる一連の予防教育プログラムの理論的基盤に基づき、情動や感情を強く喚起した状態で高次の心的特性を育成する構成を特徴としている。また、低学年児童の興味・関心を引き付ける魅力と、教員による授業運営の簡便さにも十分配慮された完成度の高いプログラムが完成している。

今後の発展としては、①自律的自尊感情のあり方、ならびに自尊感情について自律と他律の2軸で捉える方向からの脱却、②自尊感情を育成すべき学校教育システムの現状の改善、③開発した潜在連合テストに関する学校現場での簡便な実行手法の検討、④教育プログラムのより簡便な操作性と実効性、そして⑤プログラムの教育効果の長期的な持続性、などが示唆された。

以上のように、小学校低学年児童における自律的な自尊感情の測定方法の開発に取り組み、かつ小学校における自尊感情の向上を目指した教育プログラムの開発に取り組んだ本論文は、基礎研究から応用研究に至るまで丁寧に構築ならびに実行された研究論文であり、教育実践や社会に大きく貢献するものと判断された。

### 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は野口太輔の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。